阿弥陀如来坐像

一軀
木造漆箔
平安時代後期
大阪　法道寺蔵

大阪・法道寺の本堂外陣に安置されている来迎印の阿弥陀如来坐像（像高五三・一センチ）は、破損が甚しいが都出来を思わせる美作である。こどものような幼ない表情と軟らかい脹らみのある仏身は、十一世紀末―十二世紀前半の特徴のひとつであり、宇治・地蔵院阿弥陀如来立像（康和四年〈一一〇二〉頃）の面貌との類似からも、この頃の作かと推定される。

一見変ったところのない像であるが、実は不思議な木寄せ構造が見られる。ここではその紹介と併せて、その背景となった思想にまで言及したい。

一　木寄せ構造

ヒノキ材、寄木造、彫眼、漆箔仕上げ。基本的な木寄せは、頭体根幹部を正中で左右二材矧ぎとし、三道下で割首し、これに左体側部、左袖先上部、左手首先を各矧ぎ、右手は肩・臂・手首で各矧ぎ、さらに右腰脇部と両脚部を各矧ぐというものである。全身に内刳りを入れる。平安時代後期に通行のこの構造に加えて、本像は次のような特殊な木寄せ技法が窺える。

(1)　体部前面では衲衣襟際に沿って、右体側では手部との矧面から肩にかけて、左肩では襟際の途中から割首に至るまで、弧を描くように割放つ。体部前面はこの矧目を隠すように数片の板を貼りまわし、それを衲衣の折返しとする（貼板は完存しているが、一部体から剝離する）。

(2)　右肩に少し懸る衲衣は、根幹材の部分だけ、その内側の肉身をいったん彫出したあとに、別材の衲衣をその上に貼る（現状欠失）。

(3)　両足先の半ばより先を本体とは別材で完全に丸彫りし、それを膝上に載せ竹釘で留める。また左足先の上には、別材製の衲衣の一部を載せて矧ぐ。さらにその上に、左袖先と左手首先（各別材）を載せる。

(4)　像内内刳り面の両耳部に当る位置に各一の竹釘が出ているので、両耳も別材矧付けかも知れない。しかし表面の後補の漆箔のため確認はできない。

極めて特殊な木寄せではあるが、不確かな(4)を除いて、すべて肉身部と著衣部の分離という大原則に基づいていることが知られる。

二　類似の例

対馬・黒瀬観音堂の銅造如来坐像（統一新羅時代）が、衲衣の襟際で上半と下半をそれぞれ別鋳とし、互いを鋲留めしているが、これが本像以前でもっとも相似た技法であろう。しかしこの像では肉身部と著衣部の分離という原則は必ずしも明確ではない。

このような原則に従った、本像以前のわが国の作例として法界寺

薬師如来立像（永承六年〈一〇五一〉頃）がある。この像は厳重な秘仏で未調査のため西川杏太郎氏の論考（「法界寺薬師如来像考」『美術史』五六　昭和四十年）に依拠して次に技法上の特徴を述べる。

像高八八・五センチ。サクラ材、寄木造、彫眼、素地仕上げ（著衣部に截金文様、頭髪など一部に彩色）。頭部と体部（体部は肩・臂・袖までを含む）を各別材から彫出し、それぞれ背面から内刳りを入れ、開孔部に蓋板を当てる。頭・体各部を三道下で首枘差しとして接合する。これらは通常の木寄せ法と変わるところはないけれど、この他に次のような構造が見られる。

(1) 胸部と著衣部を別材で彫出し、胸前でV字形をなす衲衣の襟際で矧ぎ寄せる。

(2) 両手先は袖口に入れて、枘立てとする。

(3) 両足先（足枘を含む）は、その上方につくり出した長い丸枘を体部材の枘孔に入れて釘留めとする。なお体部内刳りは裾の内側で外に抜けている。

仏像の肉身部と著衣部を構造的に区別するまさに先駆的作例である。次に述べるように、最澄自造といわれる根本像の形式・技法を受け継いでいることから推定すると、古い時代からすでにこの種の造法があり、さらに半島または大陸にもこれがあったことが想像される。

三　特殊な木寄せの背景

『叡岳要記』や『日野一流系図』などの記事に依れば、最澄自造という三寸の根本薬師像が山を下り日野家に伝来したが、永承六年（一〇五一）、日野資業が法界寺を建立し、別の薬師像を造立してその像内に最澄自造のこの根本像を納めたという。この鞘仏としてつくられた薬師像が法界寺の現存像に当る。

ところで納入の根本像について『尊卑分脈』は、「是異域伝来生身霊像也」とある。「生身霊像」がどのような根拠に基づくかは不明ながら、古くから生身仏と意識されていたことは興味深く、その鞘仏たる現存像も同じ性格のものとして造立されたに相違ない。

生身とは、仏・菩薩に法身と生身の二つがあるうち、この世の父母から生まれた肉身のこと。実際にこの世界に生まれそして入滅した釈迦を生身仏と称し、これと対立概念である絶対原理としてのほとけの存在＝法身と区別される。清涼寺釈迦如来像を生身仏というのも、釈迦在世中に造立されたという経説に基づくもので、像内納入の五臓も生身の証しに外ならない。

五臓納入は生身仏としての顕著な一要素であるが、肉身部と著衣部の分離もそのあらわれのひとつであった。今は失われた法界寺の根本像が、肉身部と著衣部をどのような仕方で分けていたかは判らないけれど、その鞘仏である現存像と同様の分離があったものと推測される。法道寺像は、来迎印を結ぶ両手先が当初のものなので阿弥陀像であることは間違いなく、従ってこれは生身の阿弥陀であろう。

鎌倉時代以降の如来像にしばしば見ることのできる、衲衣の襟際で材を矧付ける木寄法、あるいは肉身部粉溜彩・著衣部漆箔という仕上げ法なども同じ思想的基盤をもつものである。東大寺中性院弥勒菩薩立像のように、両者分離という原則には忠実ではないものの、著衣部の材を衣端に合わせて矧ぐという、よく似た木寄せの例もこ

の思想の反映であろう。

四　写実的表現との関連

生身仏をあらわす特殊な木寄せ法は、今日知られている限り鎌倉時代以前では珍しいものだが、法道寺像の手馴た手法を見ると、この時期あるていど一般的であったかとも推測される。今後同種の藤原仏が発見されることもあるだろう。

ところで肉身部と著衣部を分けて造立された仏像は、その表現としては非常に明快な印象を与える。通常の造法ならば、厚い下地のせいもあり、襟際や両足先における肉身と衣の境目は埋まってしまうのが常であるが、法道寺像について幾つかの欠失部を復元しながら考えると、両者の分離感は極めて明瞭である。肉身と衣の上下関係だけでなく、両者が本来異質なものであるという感じもよく出ている。その意味で、漸くこの頃から行われ始めた玉眼嵌入や瞳嵌入とよく似た写実的表現の試みでもあったといえるかも知れない。

それはともかく、定朝様が全盛を極めたとされる院政期において、肉身部と著衣部の明快な分離感のある仏像が行われていたという事実は、それまでになかった新しい感覚の芽萌えとして注目すべきであろう。この表現が生身仏という思想的背景を離れて、鎌倉時代初頭の慶派仏師の作風に繋りをもつかどうかは速断できないけれど、十二世紀の京都の菩薩像で、両肩に懸かる天衣を、体部根幹材に懸かる部分だけ別材貼付けとするいくつかの例（長講堂観音・勢至菩薩像、妙法院普賢菩薩像など）があるのも、法道寺像の右肩に懸かる衲衣とまったく同巧の処置であり、この技法が写実風の表現として一部に採り入れられたことが知られるのである。

（伊東史朗）

〔法量　単位㎝〕

像高	五三・一	髪際高	四七・六
頂―顎	一七・七	面長	九・七
耳張	一三・〇	面幅	一〇・二
面奥	一三・二	胸厚（右）	一三・三
腹厚	一七・四	坐奥	二八・一
膝張	四一・四	膝高（左）	八・一
		（右）	八・九

〔後補〕

髻の上辺、白毫、像内前後に渡された棒、漆箔。

〔欠失〕

右手第一・二・三指半ばより先、左手第三指先、右肩に懸かる衲衣の一部、左膝から太腿部にかけての一部、裳先。